

「報告の成果と課題」

本報告では、近年におけるEUの統合過程におけるグローリズムの波及とその政治経済的意義について考察した。EU統合はいわゆるグローバリズムの一形態として考えることが可能であり、同時に、グローリズムはナショナリズム=アンチ・グローバリズムの一形態として考えることが可能である。したがって、ここではグローバリズムから生み出されるアンチ・グローバリズムの意義という視座を設定することができる。

ところで、グローバリズムに関しては、その効用と同時に弊害についても様々な分野から指摘されているが、特に、そうした弊害が最近のEU諸国においても現行の資本主義体制や民主主義体制の限界という傾向を助長しているきらいがある。そして、その最たるものが、国民投票を重視した直接民主制の強化と自律的主権国家間連合としてEUをとらえようとする外交政策である。こうしたグローリズム政策は、グローバリズムとしてのEU統合に対するアンチ・グローバリズムとして機能し、その障害となる可能性を有していることから、EU統合があくまでヨーロッパ的な特殊性を帯びたグローバリズムであっても、そこにより一般的なグローバリズムの要素が少なからず併存している事実を確認することができる。

さて、以上のような報告終了後、さらに質疑を受けた上での課題として、第一に、同じグローバリズムという名称で呼ばれているとはいえ、EU統合におけるグローバリズムと他の地域や分野のグローバリズムとを明確に区別する必要がある。つまり、EU統合は多分にヨーロッパ諸国の特殊事情という要素に規定される側面が強い。特に、それは日本が関わりを持つアジア地域や太平洋地域のグローバリズム、たとえばTPPのようなアメリカという覇権国が国家政策の一環として主導的に推進するグローバリズムとは根本的に性格を異にするものである。したがって、議論の精緻化のためにはこの両者を区別することが肝要である。

第二に、上記の第一課題を受けて、EU統合におけるグローバリズムの一般性について抽出し、その意義について検討する必要がある。つまり、EU統合に内包されるより一般的なグローバリズムの要素が存在する以上は、その統合が進む限りにおいて今後も各国ナショナリズムとの葛藤という問題が付きまとうであろうことは容易に推測できる。特に、EU以外のグローバリズムの多くが様々な問題に直面している以上は、今後のEU統合においてもその種の問題が生起しないとは言い切れない。したがって、EU統合の今後を展望する際にその障壁となる要素を検討することが肝要である。